

ヴィットリオ・ストラオーロ

「ドロミティを世界自然遺産のリストに含めたユネスコ、ということはサン・マルティーノ山脈を含むわけですが、そんなユネスコに拍手喝采をしますね。チモン山、ムラツ山や他の辺りの山のドロマイト岩でできた塔を、日没の太陽光線が、グレー、オレンジ、ピンクというように、さまざまな色のニュアンスで染め上げるのを見るといつも感動します。私が最高の技術を使っても再現できない光景ですね。」冷静でしかも愛想良く、このようなコメントをするのは、光や色について知り尽くしている人物である。

その人物とはヴィットリオ・ストラオーロ、73歳。世界的に、特に映画撮影の世界で「光と光の色彩の天才」と誰もが認める。この呼び名がまさに彼にぴったりであることは、彼のキャリアの中で受賞した数々の賞を見ればわかる。その中でも、フランシス・コッポラ監督の『地獄の黙示録』（1980年）、ウォーレン・ベイティ監督の『レッズ』（1982年）、ベルナルド・ベルトルッチ監督の『ラストエンペラー』（1988年）で、アカデミー撮影賞を3度も受賞している。

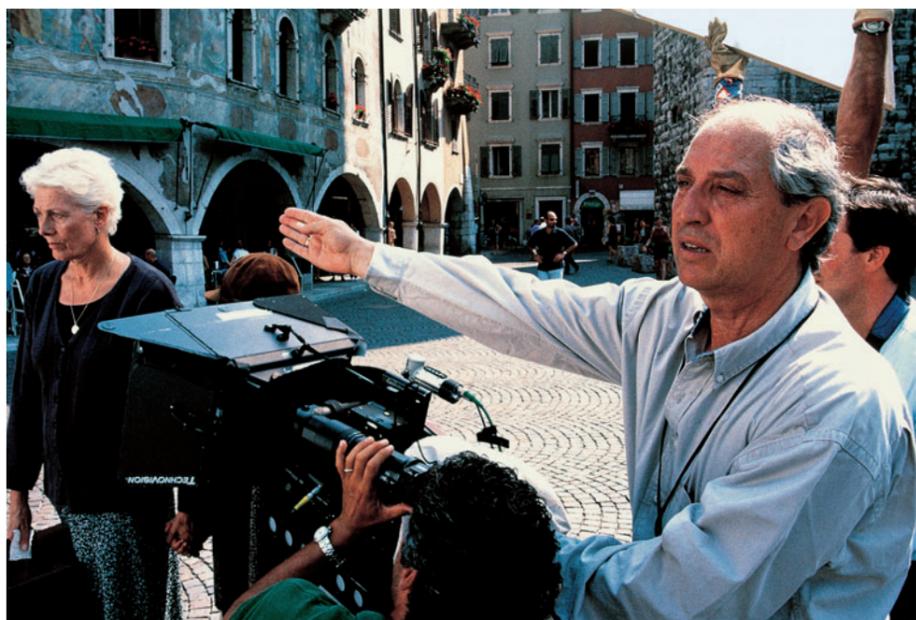
ヴィットリオ・ストラオーロのキャリアはまさしく「self made man」のものだ。すなわち、自力でこつこつと叩き上げ、映画、劇、テレビという競争の激しい世界で成功を収めた者のキャリアである。彼の仕事のしかた、実験のしかた、スタイルの作り方は、分析や研究の対象となり、時には同業者に真似されることになった。それは、有名なジャーナリストたちがその後について書いた記事からも明白である。そのいくつかを抜粋したいと思う。

ヴィットリオ・ストラオーロは、1940年にローマに生まれる。彼の家族はもともとモデナの出身だった。働きながら、ドゥーカ・アオスタ写真学校に通い、1961年には有名なローマのイタリア国立映画実験センターを卒業する。21歳の時、ジャンカルロ・ロミテッリ監督の短編映画『エトルリア学』のセットで、撮影カメラのアシスタントとしてデビュー。こうして、映画界の彼のキャリアが始まった。1961年から今日まで、ヴィットリオ・ストラオーロは映画、劇、テレビなど、100点を超える作品の「撮影」を手がけてきた。ヴィットリオ・ストラオーロは、セットで「撮影監督」と呼ばれるとディフェンス体勢になる。「撮影監督」という定義には私は馴染めません。仕事を始めた頃から私は自分の個性を表現する必要に駆られてきました。映画でも、他のありがたりの作品でも同じこと。違う定義を求めてきました。この仕事をする者は、映画の共同作者というか、作品制作の責任者なのです。映画は何人もの人の手を経て制作されます。共同作者が何人もいて、主たる作者である監督が指揮するわけです。私は、「foto-grafia」（撮影）の語源を調べました。文字どおりに訳すと、「光で書くこと」なんです。そして、後にそれがElecta出版で私が出した本のシリーズの名前となりました。撮影をする者は、映画のストーリーを光で書いているのです。それは、作曲家が音で作品を書き、作家や脚本家が言葉で書くのと同じことなんです。光の言語とそのすべての構成要素は独自の力を持っていて、楽譜の音や脚本のせりふと同じように、感情や感動を表現するのです。私たちは、ビジョンや絵画の歴史から派生した、「ビジョンを持つ者たち」なのです。しかし、画家は1枚の絵で1つのストーリーを語り、写真でもそれは同じことが言えますが、「cinemato-grafia」（動画で書くこと）は、私はこれが自分の姿に最も近いと思っていますが、「動き」という違う要素が加わるのです。始まり、展開、終わりという語りで表現されるのです。ですから、「光で書く」とは、光とそのすべての構成要

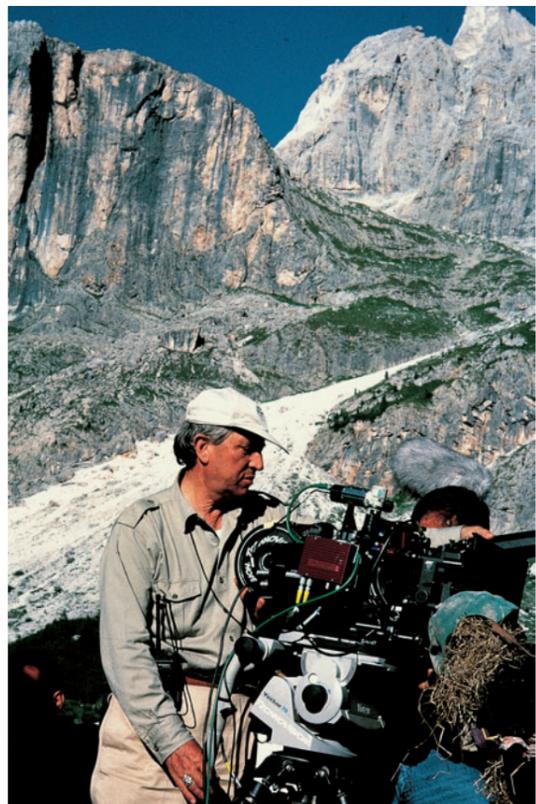
素を通して、映画のストーリーを語ることなのです。光は、言葉遣いと視覚的文法という文節を通じて、私に表現することを可能にしてくれます。色は、さらに深く掘り下げることを可能にします。光が持つ特有性です。光は、科学的な性質と振動によって、人間の身体を通じて正真正銘の感動を生み出すのです。」

言葉ではなく、光で表現をすることをなぜ選んだのかという質問、そして誰のもとで修行したのかという質問に対してヴィットリオ・ストラオーロは次のように答えた。「私は自分は作家だと思っています。モノを書くにあたって、音や言葉を使う人もいれば、私のように光を使う人もいます。私がこの仕事を選んだのは、映画の投影機のオペレーターをしていた父が投影機を作る仕事をしたいと夢見ていたからです。彼は自分の夢を全く無意識的に私に託しました。こうして私は「fotografia」（写真、撮影）という道を歩み始めました。まず、私は光

の技術に夢中になりましたが、後にこの技術は語ることの可能性ほど重要でないことを理解しました。スポットライト、感度測定、エレクトロニクス、録音、光学をどう使ったらよいかについては、誰も教えてくれませんでした。でも、私はギリシャ哲学、そして、ミケランジェロ、ミケランジェロ、ラファエッロの画派から多くを学びました。また、私の勉強やプロとしての成長では、ベルナルド・ベルトルッチ、フランシス・フォード・コッポラ、ウォーレン・ベイティという3人の監督が大きく影響しています。ベルナルド・ベルトルッチとはお互い深い理解があります。彼は、外界との関係、無意識、不合理な直感の全部を見ます。人間的に親近感があります。同時に、ベルナルドは私の精神的な案内人でした。私の人生の重要な時期において、私自身の発見をする際にそばにいてくれた人です。フランシス・フォード・コッポラと出会うことで、イタリアで私が感じていた公私の別、仕事と家庭の区別を無くすようになりました。コッポラは現実と特別な関係を持っていて、小さな世界を大きな世界、大きな工業界、大きなアメリカと調和させることができるのです。私は最初、このような大きなものに恐れを抱いていました。最後にウォーレン・ベイティですが、監督は主人公でもある以上、ひとつひとつの作



映画『ミルカ』のセットで撮影の指揮をするヴィットリオ・ストラオーロ



品をどれだけ多く内部から眺める必要があることをわからせてくれました。」

ヴィットリオ・ストラオーロはいろいろな才能を持った人であることに間違いない。彼は音楽、絵画、彫刻、文学に興味を示している。「イメージという言葉を取り囲んできた芸術表現のすべてを研究することが重要です。どの世紀においても、ひとつの表現形式が他の表現形式を案内するということがあったのですから。ギリシャ時代は彫刻と哲学、ルネサンス時代は絵画、十八世紀は音楽、十九世紀は文学の時代でした。今の世紀はイメージの世紀です。」と彼は説明する。イメージ、光、色彩は、『光で書く』というヴィットリオ・ストラオーロの三部作で分析されている（Electa出版、ラクイラ国際芸術・イメージの科学アカデミーの協力）。「年のせいで私が映画作品で考案したことを忘れてしまう前に、私はこの『光』、『色彩』、『諸要素』というシリーズを出版しました。特にそれまで書く機会がなかったことを書きたいと思ったのでした。あの保

本は私がこの手で書いたものです。もちろん、私は言葉の作家というよりは光の作家ですが。でも、他人の言葉ではなく、自分の言葉でしか説明できないことが多くあったのです。各巻がそれぞれ学習部とショーの部で校正されており、私のキャリアが10年ごとに語られています。」

ヴィットリオ・ストラオーロのキャリアは、『暗殺の森』、『ラストタンゴ・イン・パリ』、『1900年』、『ルナ』、『地獄の黙示録』、『レッズ』、『ラストエンペラー』、『シェルタリング・スカイ』、『リトル・ブダ』のようなたくさんのヒット作や、作家主義的作品や試作的作品で散りばめられている。ヴィットリオ・ストラオーロのキャリアはトレンティーノにも及んでいる。2000年には、アルジェリア出身のラシド・ベンハジ監督、大俳優ジェラルド・デバルデュ、ヴァネッサ・レッドグレイヴ出演による映画『ミルカ』の撮影者となった。この映画ではサン・マルティーノ山脈の前に広がる美しいヴェネジャ渓谷でも撮影がおこなわれた。ヴィットリオ・ストラオーロにはそのときの体験の記憶がありありと今も蘇る。「私はあの場所の無垢の自然、風景の美しさに魅了されました。特に日の出と日没にドロミティに映される魔術のような光に感銘しましたね。プリミエーロ渓谷は私の心に残っています。仕事だけでなく、観光でも再び訪れたいですね。」とストラオーロは語る。

GianAngelo Pistoia
ジャンアンジェロ・ピストイア
© Concept & design:
GianAngelo Pistoia/A.P.
© Photos:Filmart/
GianAngelo Pistoia/A.P.

俳優のジェラルド・デバルデュと
バルボラ・ボブローヴァ。
映画『ミルカ』のセットで。